

中国沿海部漁村社会の変動 －遼東半島の実例－

王 慧琴

近年、中国の沿海部は著しく変化し、発展しつつある。都市部の変化は言うまでもなく、農村部の変化もますます国内外で注目されてきている。2003年8月20日～9月2日の間に、遼東半島の漁村を中心に幾つか調査を実施した。ここでは、主にその中の代表である一例を取り上げて紹介しようとする。

今回調査した龍王塘村（大龍塘）は大連からバスで30分ぐらいのところにある。昔から「女性は嫁ぐところなし、男性はお嫁をもらう金なし」という言葉がずっと伝えられていて、かつては小さくて貧しい漁村であった。

1996年に元の大龍塘村は隣りの官房子村と大石洞村および小龍塘村の四つの村を合併し、今の龍王塘村になった。現在村の面積は31平方キロメートルである。合併した後、村の人口は5000人あまりで、1566世帯である。そのうち、漁業に従事する人はわずか256世帯であり、自営業は820世帯である。漁業に従事する人は自営業よりはるかに少ないことがわかった。その主な原因は元々農業を中心とした官房子村、大石洞村と合併したからであると考えられる。元の大龍塘村は海岸が長くて農地があまりないという農業経営の面についてのデメリットがある。養殖業など新しい産業が発展するには条件的にかなり難しい。合併した後、官房子村と大石洞村の土地を開発し、養殖業などを興し、新しい産業に取り組んでいる。現在村の目標としては、一つは、4000万元を投資し、大龍塘村と小龍塘村の海岸を利用して、港の改造を進めていることである。いま一つは新しい産業の発展に力を入

れて、村を“小城镇”（小さな町）として建設することである。もし、この二つの目標が達成できれば、この地域の漁民生活に大きな変化をもたらすことになるだろうと推測される。

前に述べたように、この村は改革開放前、かなり貧しかった。1983年に一人当たりの収入は300元にも達していなかった。2002年一人当たりの収入は9300元に上った。人びとの生活水準が前と比べて、随分と変わった。現在村の60%の人がマンションに入っており、一人当たりの居住面積は35平方メートルである。現在、電話、テレビがない家庭は一軒もなく、30%の家庭がパソコンを購入している。

中国では1949年に新中国が成立して以来、ずっと、都市戸籍と農村戸籍の二分類政策を取っている。漁村はいうまでもなく農村戸籍になっている。農村戸籍である以上、普通年金ももらえないし、医療保険もない。年金と医療保険は村の人々にとって生活を維持する上できわめて重要な問題といえるだろう。しかし、近年、経済の発展にともない、以前都会の人しか年金がもらえないと考えられていたが、現在村の60歳以上の老人にも月に110元の生活補助金（いわゆる年金）がもらえるようになっている。まだ60歳になっていない人は、毎年自分が140元を支払い、それに、村の方から140元を補助金として援助されている。60歳になってから、これが年金として支払われることになっている。もう一方、病気になった場合の医療費の問題である。これも改善されつつある。今まで農村部の人々は

医療保険がないため、入院する時の費用は全額自己負担となっている。あまりにも高額で、支払う能力がない人もかなりいたといわれる。現在、この村の90%以上の人々はすでに医療保険に加入している。それに医療保険に加入すれば、さらに、毎年村の方から医療費の手当ももらえることになっている。もちろん、加入しないと、その手当でも出してくれないという原則である。

この地域の人々にとって、一番の誇りとなっているのはむしろほかの村とは比べにもならない毎月の特別な待遇があることである。例えば、毎月一人に5キロの米、5キロの小麦粉、2.5キロのサラダ油と2.5キロの卵を無料で配分される。これは普通、都会でもあまり無いところである。

今回の調査の対象はある老夫婦であった。65歳（1938年生）の夫は若い頃からずっと漁業に携わった。何十年の経験を持つベテランである。3人の息子も彼について船の操縦から漁撈の知識などを学んでいる。87年には40馬力の船を買ったが、現在は200馬力と300馬力の船を二隻持っている。漁獲能力は十何年前と比べて随分と増加した。

海での漁撈は運しだいといわれ、しかも変化の激しい天気や潮の流れや波に対処しなければならなかった。そのため、海での安全や漁獲に対して、その加護をもとめることは重要な意味をもっている。この地域の民間信仰について、何か行事があるかと尋ねると、妻は次のように教えてくれた。この村では、旧暦の1月13日に海神の天后娘娘を祭る行事が行われる。この日、村の人々は豚や羊などを賭殺し、提灯を海の中に流して、一年中の豊漁を祈願するそうである。この地域の民間信仰は東南沿海部と比べて、さほど盛んではないが、この地域の独特な民間信仰がまだいくつか残っている。例えば、前に述べたように、

漁撈の際、主に海神の天后娘娘を祀り、また龍王（竜神）を祀る。

この地域の漁撈活動の中で、もっとも重要な人物は“船老大”である。彼は船主であり、漁撈長でもある。魚がとれるかどうか、海での安全がどうであるかのすべては、この“船老大”の判断による。そのため、人々は普段から彼を尊敬している。例えば、魚料理がテーブルに運ばれると、魚の頭を船老大に向ける。船老大はその組織の中の「頭」を意味する。組織の中の「頭」と魚の「頭」を結び付けて、これからの漁撈中に運に恵まれるように祈願するのである。彼の運命はこの船全員の運命に関わるからである。今、船が大きければ大きいほど、“船老大”の地位と役割も高くなる。

今回の調査はただその変化の概略の把握にとどまっていて、その変化の詳しいプロセス及び変化の原因をさらに究明する必要がある。これからの調査によってこれらの課題を明らかにしようと考えている。

参考文献

日本版

王 崧興 中華民国56年 『亀山島－漢人漁村社会之研究』

中央研究院民族学研究所 専刊13

亀山慶一 1986 『漁民文化の民俗研究』 弘文堂

瀬川清子 1943 『販女－女性と商業』 未来社 (1971年新版)

高桑守史 1983 『漁村民俗論の課題』 未来社

矢野真和・袖井孝子 1987 『現代女性の地位』 勁草書房

中国版

欧陽宗書 1998 『海上人家』 江高校出版社